

フランシスコ・ゴヤの作品における身体表現研究 ： 古典主義の身体からサトゥルヌスへ

著者	増田 哲子
内容記述	筑波大学博士（文学）学位論文・平成24年3月23日 授与（甲第5976号）
発行年	2012
URL	http://hdl.handle.net/2241/117509

氏 名 (本籍)	増 ^{ます} 田 ^だ 哲 ^{のり} 子 ^こ (栃木県)			
学 位 の 種 類	博 士 (文 学)			
学 位 記 番 号	博 甲 第 5976 号			
学位授与年月日	平成 24 年 3 月 23 日			
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当			
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科			
学 位 論 文 題 目	フランシスコ・ゴヤの作品における身体表現研究 －古典主義の身体からサトゥルヌスへ－			
主	査	筑波大学准教授	博士 (文学)	山 口 恵里子
副	査	筑波大学准教授	博士 (文学)	濱 田 真
副	査	筑波大学准教授	博士 (哲学)	廣 瀬 浩 司
副	査	昭和女子大学生活機構研究科教授		木 下 亮

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、フランシスコ・ゴヤの身体表現が、1770 年代に描いた古典主義の影響を受けた理想化された身体から、晩年に描いた暴力的な「食べる」身体へと変化を遂げてゆく過程を、近代西欧における美学の変遷に照らし合わせて追跡したものである。ゴヤは、宮廷画家として公的な注文画を描くいっぽうで、版画、素描、壁画等においては古典的な美の価値観からではとらえきれないグロテスクな身体を数多く描いている。本論文は、ゴヤがいっぽうではアカデミーの規範に倣った「理想的な」身体を描きつつ、他方では物質性を強調した身体を描いたことに着目し、ゴヤの身体表現の変容をその美学的、思想的背景のなかで明らかにすることを目的としている。

論文は全 6 章で構成される。第 1 章ではまずゴヤが画家としてのキャリアをスタートさせたタピスリーカートンにおける身体表現が論じられる。ゴヤは、当時のスペイン美術界に大きな影響力をもっていたメングスやゴヤの義兄バイェウの下で彼らの美学理論に注意を払ってカルトンを制作した。カルトンでは民衆もメングスらが唱えた古典主義の美の規範に沿うような演出された身体で描かれているが、本論文は、ゴヤがカルトン制作についての書簡のなかで用いた語 *invención* がメングスの美術理論で重要視された「構想」の意味で使用されたことを明らかにし、ゴヤへのメングスの直接的な影響をこの語の使用からも証明した。「タイプの」な表現を用いて描かれたカルトンの身体は、当時の「タイプ版画」とよばれる版画作品や大衆演劇に登場する典型的な民衆像との類似点をそなえたものだが、20 年後の『マドリード素描帖』等の素描帖ではマホやマハ、ペティメートレ、ペティメートラといった 18 世紀スペインの民衆の身体がタイプの民衆像から逸脱し「歪み」はじめていることが指摘される。

第 2 章では、ゴヤがアカデミーへの入会を許可される契機となった《十字架上のキリスト》(1780) のメングスに倣った身体表現が、それ以後の肖像画では古典主義的な理論や様式から巧妙に距離をとり変化していく過程が跡づけられる。ゴヤはモデルの本質を「自然」のなかで捉えるようになり、またモデルとゴヤの親密な関係を反映した肖像画を描くようになるのだが、この変化は、ゴヤと親交があったホペリャーノスやセアン・ベルムデスらの思想に代表される当時のスペイン美学が、理想化された身体から自然主義的身体

に重心を移すようになった変化に呼応したものである。本論文は、この変化を論じるにあたり、啓蒙思想家たちが近代的「国家（Nación）」としてのスペインの成立を求め、スペインの独自性を表明しようとする実践的な価値の重視と関係していた背景も視野に入れている。

第3章では、ホペリャーノス、さらにゴヤのカディスでの保養先を提供したセバスティアン・マルティネスらの登場により、鑑賞者の感覚に直接作用する芸術作品が重視されるようになったこと、その美学にエドマンド・バークの崇高論が影響していたことを論じ、マルティネス邸滞在後に描いた《精神病院の中庭》(1793-94)の制作状況を詳らかにした。この作品を含む居室画のシリーズにおいて、ゴヤは自身の奇想と創意に従って主題を選んだ。ゴヤを選んだ主題は精神病院、火事、難破、監獄といった暗澹としたものである。この事実は作品の受け手が不気味なものや恐怖を感じる対象を求める新しい感受性を有していたことを示すものである。本論文は、このような鑑賞者の主観に基づく作品の観賞態度がこのとき発生したことを、ゴヤ作品の変化を通して明らかにしている。

続く第4章は、《裸のマハ》を宰相マヌエル・ゴドイのキャビネットに展示された居室画として論じた。そのキャビネットに飾られていたベラスケスの《鏡のヴィーナス》等の裸婦像との比較から、メンゲスの理論に反した白いなめらかな皮膚をもつマハの裸体が、「近代性（モダニティ）」を表出する身体として描かれていることが明らかにされた。またゴヤの『サンルーカル素描帖』の女性のスケッチとの比較からも、ゴヤがマハを描くにあたり18世紀末のスペインの現実の女性に着想を得たことを指摘した。

第5章では『戦争の惨禍』で描かれた傷ついた身体や積み上げられた死体に着目し、それらの身体が同時にゴヤが描いた静物画の動物の肉のように物体として描かれるいっぽうで、人間の身体がもつ本質的な脆弱性も露呈していることを論じた。ゴヤはさらに古代彫刻のような身体を寸断し、あるいは倒れた人々を塊として描くことによって、人間の身体の「フォルム」の破壊を強調した。筆者は、このような身体を考察するにあたりジョルジュ・バタイユの議論を参照し、ゴヤが描いた身体の現代的な意味をも追究している。

第6章は、ゴヤ晩年の壁画『黒い絵』の中の《わが子を食べるサトゥルヌス》(1820-23)に焦点を当て、「食べること」と死と老いに触まれた身体の表現を分析した。その身体イメージでは、カニバリズムのテーマが自分自身を食べるイメージとして展開され、開いた口はみずからの老いと死が充たす内面深くに通じる「穴」となった。この穴である口をもつ身体は、歪曲され、不気味に「笑う」人物の姿へと変形されてゆく。この変形は、『黒い絵』以後の素描や版画で描かれる、大きく弓なりに歪曲した口をもつ老人のイメージの連作にも見られる。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、18世紀スペインの美学史、思想史を背景にして、ゴヤの身体表現の変容の過程を、ゴヤのパトロンとの関係、鑑賞者の作品受容における態度の変化、スペインの政治的文化的状況、さらにはゴヤ自身の病や老いとの関係をふまえて、追跡し、分析した論文である。スペイン語の文献を含め、先行研究を網羅し、それらの研究を十分に参考にしながらも批判を加えて、明快な論述で議論を展開している。ゴヤ研究において身体表現の研究は新しい分野であり、本研究によって新たなゴヤ像が呈示されたといえる。それは、本研究が美術史に基づいた考察だけでなく、18世紀スペインの美学史や思想史、文化史のなかでゴヤの身体表現をとらえようとした独創的な試みによるものである。美の規範から逸脱していくゴヤ作品のスタイルの変化や、5章で詳述される身体イメージの崩壊、および6章でとりあげた「食」や「口」に関する身体イメージに関する考察は、「グロテスク」な身体イメージがじつにさまざまなイメージの変遷を経て生み出されたことを明らかにしている。タイプ版画の考察では、細部にわたる衣裳の分析、メディアとしての版画の機能への着目、演劇のプロトタイプとの比較考察など、筆者ならではの視点でゴヤ研究の新たな領野を開いた。

ゴヤの身体表現の研究では、宮廷画家として規範的な身体を描きながらも病を経てグロテスクな身体を描くようになったことが指摘されていたが、本研究では罹患以前にすでにグロテスクな身体表現の萌芽が素描帖に見られ、その萌芽が『戦争の惨禍』や『黒い絵』における身体描写を生み、ついには「笑い」の表現に結実していったことが詳細な論述によって明らかにされた。ゴヤ研究がロマン主義的な研究に傾倒していたことの反省として、近年、啓蒙主義との関わりからのゴヤ研究が増えているなかで、本研究も後者の研究に立脚しているものの、ゴヤの身体表現の変形に、啓蒙主義の裏返しとしての反理性的要素も見つめている。以上のように、本論文は、多くのゴヤ作品からゴヤの身体表現の独自性や革新性を問うのに適切な作品を抽出し、思想史や文化史の概念を援用しながらそれらを丹念に分析したことによって、ゴヤ研究の新たな側面を開いたといえる。

質疑応答では、ゴヤ作品におけるロマン主義的要素と啓蒙主義的要素が対立ないしは矛盾するものではなく、連続した要素である可能性が指摘された。その連続性は、ゴヤが晩年に描いた「笑い」のもつ二重性、すなわち近代的な個が呈する笑いとはフチンが論じたような中世のグロテスク・リアリズムにつながる笑いという二重性にも波及する。このような二重性は、ゴヤの身体が「理想的な美」を反映する身体からグロテスクな身体へという一方向的な変容ではなく、むしろそれらの身体イメージが同時に、あるいは反復して発生していたという身体イメージの同時性、反復性にも通じる問題である。また、その複雑な身体イメージを受け止めていた鑑賞者の位置づけ、およびゴヤと鑑賞者との受け止め方のずれについても質疑応答がなされた。これらの質問は、美術史のみならず、哲学や文学のなかでのゴヤ作品の解釈の可能性についても問うものであり、その可能性は、本論文が美術史研究のなかで身体や感覚の問題を深く論じたがゆえに開かれた可能性でもある。

平成 24 年 1 月 17 日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。